

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



仙台朝市

父が仙台支店に転勤になった。弟と私は東京の祖母の家から学校へ通い、夏冬の休みだけ仙台の両親の許へ帰っていた。東京は極度の食糧不足だったが、仙台は米どころでもあり、たまに帰省すると別天地のように豊かであった。東一番町のマーケットには焼きがれいやホッキ貝のつけ焼の店が軒をならべていた。(中略)

仙台の冬は厳しい。代理店や外交員の人たちは、みぞれまじりの風の中を雪道を歩いて郡部から出て来て、父のねぎらいの言葉を受け、かけつけ三杯でドロクをひっかけ。酔わない方が不思議である。締切の夜など、家中が酒くさかった。ある朝、起きたら、玄関がいやに寒い。母が玄関のガラス戸を開け放して、敷居に湯をかけている。見ると、酔いつぶれてあけ方帰っていった客が粗相した吐瀉物が、敷居のところいっぱい凍りついている。

玄関から吹きこむ風は、固く凍ったおもての雪のせいか、こめかみが痛くなるほど冷たい。赤くふくれて、ひび割れた母の手を見ていたら、急に腹が立ってきた。

「あたしがするから」

汚い仕事だからお母さんがする、というのを突きとばすように押しつけ、敷居の細かいつらいつらにいつはいつまもの爪楊子で掘り出し始めた。

保険会社の支店長というのは、その家族というのは、こんなことまでしなくては暮らしてゆけないのか。黙って耐えている母にも、させている父にも腹が立った。

気がついたら、すくうしろの上りかまのところに父が立っていた。

手洗いに起きたのだから、寝巻に新聞を持ち、素足で立って私が手を動かすのを見ている。

「悪いな」とか「すまないね」とか、今度こそねぎらいの言葉があるだろう。私は期待したが、父は無言であった。黙って、素足のまま、私が終るまで吹きさらしの玄関に立っていた。

(向田邦子「父の詫び状」)



『父の詫び状』(1980年 文藝春秋)

小池 光の 気になる日本語

13

「すみません」

日本語には挨拶のことばがたくさんある。すみません、もそのひとつだ。ふつう軽い謝意、感謝の気持ちをいう。

また、本当にあやまる場合も用いる。そのときは強くこころを込めて、すみません、というので、そのニュアンスの差は聞けば誰にでもわかるようになっている。

すみませんは済みませんで、言葉などでは済まないことは重々承知していますが、というところからきています。「すまない」の丁寧表現である。

お店に買い物に行くと、お店の人が誰もいない。こういうとき奥に向かって「すみません」と呼びかける。なんといつて呼ぶかといえはこういふときも「すみませーん」と呼びかける。時折そんなことをしているが、考えてみるとふしぎなものである。こちらはなにが悪いことはしていない。ただ買い物にきただけである。なにもしていないのに、まず謝ってしまうのが奇妙といえ

ば奇妙だ。

でもなぜそういう状況ですみませーんが出るかといえは、こういうことだろう。

店には必ず店番の人がいる。なのにいまその人がいない。ということ

があって、それに拘わっているに違いない。そういう止むを得ざる事態が発生しているのに、あえて呼びたてずるのが申し訳ない。それが「すみませーん」なのだろう。相手の状況、気持ちをおもひにかかっているのである。

「すみませーん」と呼びかけると、店の人が「すみません」と言っ出てくる。こちらは不在して申し訳ないと言っている。「すみませーん」「すみません」で過不足なく会話が成立する。日本語はおもしろい。

わたしは船岡(現柴田町)で育った。船岡のことばでは、お店の人がいないとき奥に呼びかけるのに「すみませーん」とは言わなかった。独特の節をつけて「くーない」というのであった。

「くーない」は「ください」ないし「呉れない?」の転である。「すみませーん」より謝っていない分、率直である。

小学校六年のとき仙台市内の学校に転校したが、学校近くのお店で「くーない」とやってみんなに笑われた。クラスメイトに聞くと「もーし」と仙台では呼びかけるのだそうである。「もーし」は「申し」で侍言葉風である。さすが仙台は違うと思った。いま「すみませーん」と店の奥に声をかけるとき、きまってこのときのことを思い出す。

学芸室日記

○12月7日(金)から3日間、イズミティ21で、こまつ座&ホリプロ公演「日の浦姫物語」がありました。初代館長井上ひさし40代の頃の作品で、兄と妹の許されない愛を発端とする悲劇に、作者ならではの笑いがちりばめられた物語です。初日に三陸沖を震源とするM.7.3の地震が発生。安全を確認した後、緊張が解けた後、大竹しのぶさん、藤原竜也さんはじめ素晴らしい



日の浦姫物語

役者さんの巧みな演技に、会場からはどっと笑いが。井上ひさしの写真が掲げられたカーテンコールでは、大きな拍手が鳴りやみませんでした。

○12月9日(日)に8回目となる仙台朗読祭2012を開催しました。前年を上回る55組のエンターティナーがありました。3分の持ち時間の中で、それぞれの好きな作品を朗読するというシンプルな催しですが、毎年参加を楽しみにされている方が多く、参加者の朗読を聴き、翌年朗読する側として参加される方もいます。静



かなつながりが生れているイベントです。

○館内喫茶「杜の小径」では毎年「仙台雑煮」を提供しています。焼きハゼにイクラ、かまぼこ、セリ、ズイキなどが入り色鮮やかです。この雑煮にかかせない焼きハゼは、東日本大震災で甚大な被害を蒙りながらも漁を再開された、石巻長面の榎さんが手がけたものを使っています。復興支援の思いも込め、心を込めて作っていますと店長。この雑煮を求めて、1月5日(土)の新年開館の初日には長蛇の列ができました。



○年明けは厳しい冷え込みが続きました。池は氷が張ったまま溶けず、うっすらと雪が積もり「パンダ」のような模様ができていました。また建物の排水管には1メートルを超える長い氷柱も。そんな寒い季節ですが、館内の情報コーナーには、新聞や本を読む方の姿があり、ゆっくりとした時間が流れています。文学館の大きな窓から、白く染まる樹木をぼんやりと眺めるのも悪くないかもしれません。

丸谷才一「あいさつは一仕事」



丸谷才一「あいさつは一仕事」
(朝日新聞出版)

昨年の十月に、丸谷才一さんが亡くなった。それが日本の文学界にとって大きな損失であることは言うまでもないが、ぼく個人にとってもたいへん寂しいことなのだった。

ぼくはイラストレーターであり、グラフィック・デザイナーでもある。丸谷さんはその両面を、とても認めてくださっていた。おかげでぼくが装丁・挿絵を担当した丸谷さんの著書は、単行本、文庫本を合わせて八十冊以上になる。



最初に手がけたのは一九七〇年の「女性対男性」というエッセイ集。その中に数点の挿絵を入れた。その絵が気に入ったという内容のお手紙をいただいたのが、丸谷さんのお付き合いの始まりになる。付き合っていると、言っても誘いあわせて酒場に行く、という種類のものではない。作家と装丁家兼挿絵画家、という仕事上のお付き合いである。

その頃から雑誌に載る丸谷さんのエッセイの挿絵、単行本の装丁など、ご指名にあずかることが多くなった。やがて「多くなった」ところか「大半」になり、そのうち「全部」になった。それは有難いことであり、名譽なことなのだが、ぼく一人が引き受けていいるものだろうか、という不安もあった。

けれども丸谷さんは、ぼくが挿絵を描いた雑誌や装丁を担当した本が出版されるたびに、お便りをくださった。そこには挿絵や装丁への感想が書かれていた。どこが良かったか、どこに感心したか、ということが短い言葉で的確に表現されていて、それがぼくにとってずいぶん励みになったのだ。

丸谷さんの業績の大きな二本柱は、小説と文芸評論だろう。

エッセイは小説家にとって創作の傍ら書くものでもあられるけれど、丸谷さんならではの教養とゴシップ、それにユーモアで彩られ、おもしろさも抜群である。

小説の中でぼくが好きなのは「雀まくら」「横しぐれ」「樹影譚」「輝く日の宮」。

また別の二本柱を挙げてみよう。小説家にとっては余技のようなものかもしれないが、その一つは俳句(連歌を含む)。丸谷さん七十歳の時に記念して出版された「七十句」はなかなかの名句ぞろいである。それまでに詠んだ数多くの句から連歌仲間でもある詩人の大岡信さんが選んだのだそうだ。

連歌は安東次男さんを宗匠として丸谷さん、石川淳さん、大岡信さんが巻いたものを本にした「歌仙」を第一作として、

別の二本柱は、翻訳とエッセイである。丸谷さんは東大英文科卒業で英語に強い。アメリカのものではエドガー・アラ

ぼくが挿絵を描いた雑誌

別の二本柱は、翻訳とエッセイ

また別の二本柱を挙げてみよう

メンバーを少しずつ変えながら

丸谷さんのスピーチは三冊の本

何作も続いていた。井上ひさしさんが加わった回もある。このシリーズのおもしろいのは、巻き終えた後のメンバーの座談会だ。それぞれが自作の解説をしながらお互いに批評し合う。その様子がユーモラスに記録されている。

「あいさつは一仕事」の三冊。丸谷さんは必ず原稿を用意してスピーチに臨んだ。その原稿が残るので本にすることができる。作家ならではのことができる。

三冊目の「あいさつは一仕事」の巻末で、ぼくは丸谷さんにインタビューしている。なぜ原稿を用意するのかというぼくの質問に対する丸谷さんの答は「失言しないためにも原稿は必要だった」だったので、ぼくは「スピーチの心得その一、原稿を用意

すること」と記録した。その二が「長すぎるスピーチはだめ」、その三が「余計な前置きを入れるな」、その四が「引用はひとつにせよ」(漱石の言葉を引用したかと思うと教育勸語の引用、ビートルズの歌を引用したりすると、聴くほうの頭が混乱する

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

もう一つは「挨拶」である。「スピーチ」と言い替えてもいいだろう。丸谷さんの挨拶(またはスピーチ)はおもしろいという定評があった。そして確かにおもしろかった。そのことを文学者の業績の一つに数えるのはおかしいかもしれない。けれども

「長すぎるスピーチはだめ」、その三が「余計な前置きを入れるな」、その四が「引用はひとつにせよ」(漱石の言葉を引用したかと思うと教育勸語の引用、ビートルズの歌を引用したりすると、聴くほうの頭が混乱する

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

「和田先生が描く似顔絵って、どうしてあんなに似ているんですか?」

「それは訓練の賜物ですよ。中学の頃は授業中に先生をモデルにひたすら似顔絵を描いてましたから。時間割表を科目名の代わりに先生の似顔絵で埋めてやるぞって」

「長すぎるスピーチはだめ」、その三が「余計な前置きを入れるな」、その四が「引用はひとつにせよ」(漱石の言葉を引用したかと思うと教育勸語の引用、ビートルズの歌を引用したりすると、聴くほうの頭が混乱する

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

から)、その五が「おもしろい話を入れる」、それから「ゴシップを有効に使え」、「悪口を二入れたら、十か二十ぐらい褒める」など、これからスピーチを頼まれそうな読者には有益なサジェスチョンがあって、おもしろくて役に立つ本なのである。

小池光ことばのセッション vol. 7

「和田誠に聞く ～ことば・本・装丁・デザイン」

「和田先生が描く似顔絵って、どうしてあんなに似ているんですか?」



和田誠さん(左)と小池館長

「それは訓練の賜物ですよ。中学の頃は授業中に先生をモデルにひたすら似顔絵を描いてましたから。時間割表を科目名の代わりに先生の似顔絵で埋めてやるぞって」

仙台文学館の小池光館長が毎回多彩なゲストをお迎えして楽しいトークを繰り広げる「小池光ことばのセッション」。去る12月には、開催中の企画展「和田誠ポスター展」にちなんで和田誠さんが登場しました。

実は筆者は今、「イラストレーターの和田誠さん」と書きかけたのですが、「和田さんをその肩書で呼びするのは、ちょっと待った!」というのが、この日のトークのテーマでした。

グラフィックデザイナー、イラストレーター、装丁家、エッセイスト、脚本家、映画監督、俳優、作曲家、俳人……。和田さんの多才ぶりは、まさに「現代のダ・ヴィンチ」です。小池館長がそれらの世界について一つ一つお尋ねしていくと、和田さんがそれに淡々と回答し、そのたびに客席からは爆笑や「へえ〜」という感嘆が湧き上がりました。

和田さんは、井上ひさし初代館長が主宰して台本も書いていた、こまつ座のポスターもたくさん制作しています。

「こまつ座のポスターを作るのは面白かったです。刺激的で、たいていは台本が上がる前にポスターの方が先にできちゃって、校正刷りの状態で待っている。そこまで進んでいたのに配役どころか題名まで変更なんてことも。そうすると主役の似顔絵から描き直します。「幻のポスター」が何点もあるんですよ」

さらに、恒例のサイン会が終わった後でうれしいハプニングが。展示をご覧になっていた和田さんが館長と立ち話をなさっているうちに、いつの間にか展示解説をしてくださったのです。思わぬ幸運に、参加した皆さんは大満足の様子でした。



サイン会も大賑わい

和田誠(わだまこと) 1936年、大阪生まれ。グラフィックデザイナー、イラストレーター。1959年多摩美術大学卒業。ライトパブリシティに入社。同年タバコの「ハイライト」のパッケージデザインコンペに入賞。1968年よりフリー。1977年から現在に至るまで「週刊文春」の表紙(絵とデザイン)を担当。数多くのポスターや装丁、挿絵、絵本を手掛ける。主な著書に「お楽しみはこれからだ!」シリーズ、「銀座界隈ドキドキの日々」「本漫画」「東京見物」など。また映画監督として「麻雀放浪記」「快盗ルビイ」などを制作。活動は多岐にわたる。



photo Masahiro Maeda

注目イベント

「樋口一葉に聞く」、「頭痛肩こり樋口一葉」を耳で味わってみませんか。展示室内に設けた「展示室劇場」で、在仙の演劇人によるリーディングを行います。



過去に開催した「展示室劇場」の様子

◆「樋口一葉に聞く」

日時= 2月24日(日)
11:00 ~ 11:45、13:30 ~ 14:15
3月23日(土)、3月24日(日)
11:00 ~ 11:45

出演=白鳥英一(OtoOpresents)、
前田佳澄(演舞集団紅神楽)

定員= 40人

◆「頭痛肩こり樋口一葉」

日時= 3月23日(土)、3月24日(日)
どちらも 13:30 ~ 16:00 *途中休憩有り
出演=上島奈津子、前田佳澄(演舞集団紅神楽)、
加藤綾子、山下ゆり(劇團河馬巻)、
熊谷由海、伊藤広重

演出=芦口十三

定員= 40人

*参加希望の方は、電話・ファックスのいずれかで、氏名、電話番号、希望の日時を明記の上、仙台文学館へ。入場の際には展示観覧券が必要です。

より深く作品について知りたい方には…

◆対談「井上ひさしの評伝劇〜

『頭痛肩こり樋口一葉』を中心に」

日時= 3月9日(土) 13:30 ~ 15:00

出演=永井愛(劇作家)、

小森陽一(東京大学大学院教授)

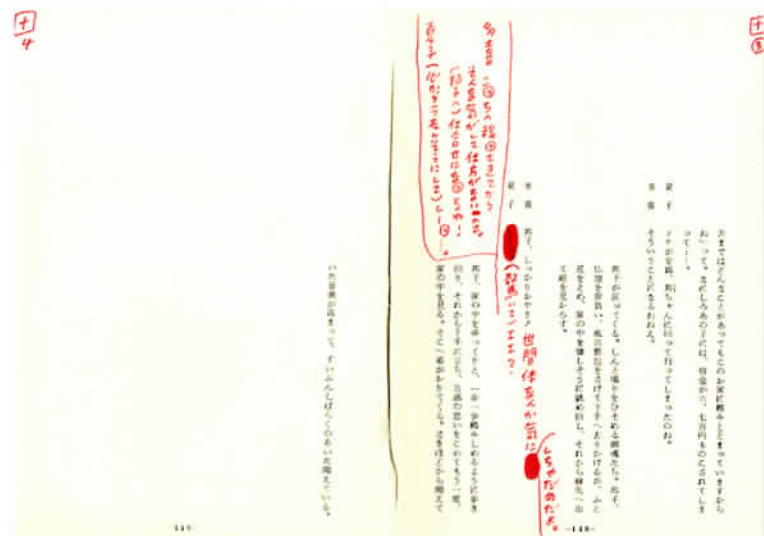
定員= 100人

*参加希望の方は、往復はがきに、住所、氏名、電話番号を明記の上仙台文学館へ。締切2月22日(金)必着。

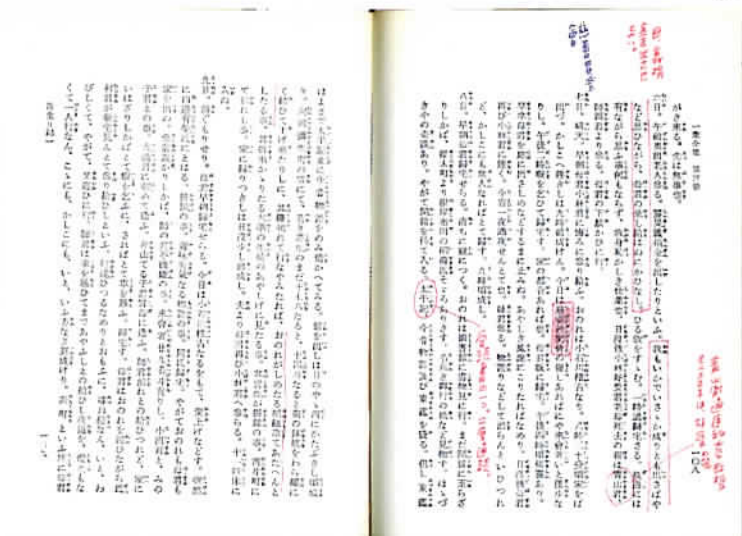
◆学芸員による展示解説

日時= 3月17日(日) 13:30 ~ 14:30

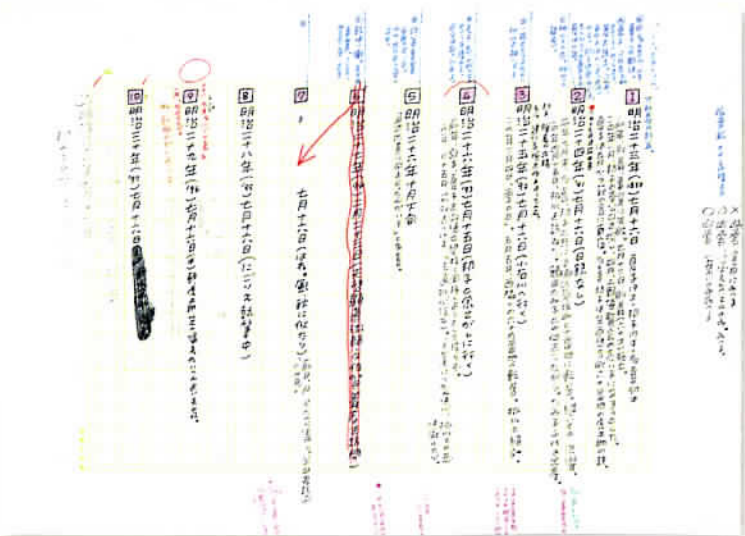
*申込不要ですが、展示観覧券が必要です。



芝西庵(新十郎)の台本のゲラ。この段階で多くの加筆や訂正がなされている。



井上ひさし旧蔵の「一葉全集」(一九六一年筑摩書房)に至るといふに傍線や書込みがなされている。(遼筆堂文庫蔵)



七月十六日に着目した一葉の年譜伝記的事実と、劇構想の両方が書き込まれている。

井上ひさし「せりふ」展

「井上ひさし生誕77フェスティバル2012」にちなみ、昨年の夏に紀伊國屋画廊で開催された「井上ひさし「せりふ」展」もご紹介しています。70作に及ぶ戯曲の中から選ばれた珠玉の「せりふ」を、目と耳でお楽しみ下さい。

井上ひさし資料特集展 VOI.2 頭痛肩こり樋口一葉

二〇一三年二月二十六日(土) ~ 四月七日(日)

二〇一二年に当館に寄贈された、初代館長井上ひさしの資料を紹介する展示の第二弾です。今年『頭痛肩こり樋口一葉』を取り上げます。『頭痛肩こり樋口一葉』は、明治の女性作家・樋口一葉の生涯を描いた評伝劇。一九八四年のこまつ座の旗揚げ公演の上演戯曲であり、これまで何度も上演されてきた人気の作品です。この戯曲は、当初書かれたプロットから大きな変更を施されて成立しています。展示では、破棄された初期のプロットやメモなどの資料から、「文学」とその背後にある「社会」を見つ



『頭痛肩こり樋口一葉』(1984年 集英社)

めた一葉を、作者がいかに描こうとしていたかにせまります。またこの評伝劇を際立たせる、「盆の七月十六日の夕刻」という場の設定、一葉が生前に自ら与えた「戒名」、幽霊の「花螢」といった着眼点が、作者によっていかに掘り下げられ深められたかを、様々な創作資料や、執筆にあたって参考にした一葉日記等の資料と併せて紹介します。日本のゲラ校正、執筆に際して調べた書籍などの資料から、決定稿が完成する過程をじっくりご覧ください。



旗揚げ公演のチラシ

樋口一葉(ひぐちいちよう)



【the 座】27号(1994年5月)

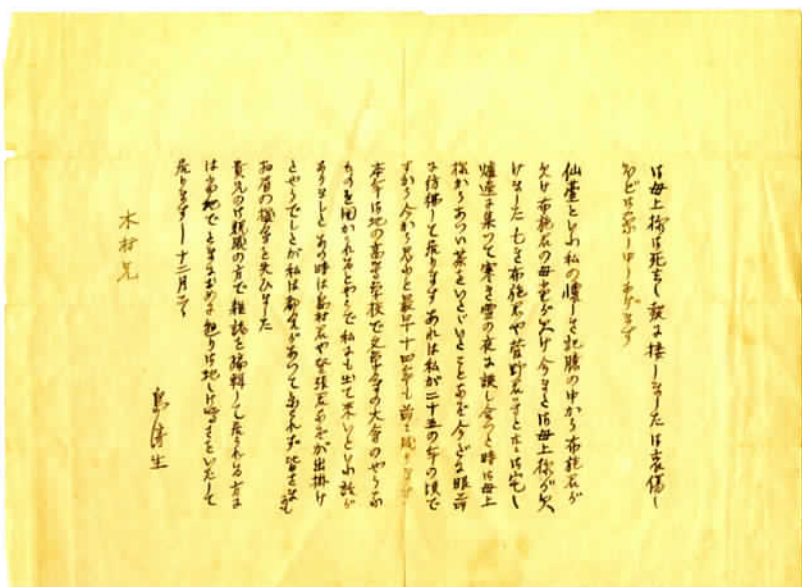
明治五(一八七二)年、明治二十九(一八九六)年、東京府の官吏樋口則義・たきの次女として生まれる。本名なつ・夏・夏子とも(戸籍名は奈津)。中島歌子の歌塾「秋の舎」に入塾し和歌を学ぶ。父が事業に失敗してのち、樋口家の戸主となり一家を支えるようになる。明治二十七年十二月から二十九年一月の間に「にこりえ」「たけくらべ」などの日本の文学史に残る作品を発表するが、肺結核のため二十四歳で夭折。



『頭痛肩こり樋口一葉』の「花螢」の衣装もご覧いただけます。(こまつ座蔵)

新資料紹介 鳥崎藤村書簡 (木村康託宛)

明治四十二年十二月二日
鳥崎藤村書簡 木村康託宛
(封書 無郵便箋 一枚 ペン書き)
(表) 仙台市北七番町
木村康託様



母上様御死に報に接し
ました御哀傷のほど御察
し申しあげます
仙台といふ私の懐しき記憶
の中から布施君が欠け今また御
母上様が欠けました亡き
御母上様御死に報に接し
ました御哀傷のほど御察
し申しあげます
仙台といふ私の懐しき記憶
の中から布施君が欠け今また御
母上様が欠けました亡き

消印 明治四十二年十二
月三日
(裏) 東京都浅草区新片町一
鳥崎藤村
消印 明治四十二年十二
月四日

御母上様御死に報に接し
ました御哀傷のほど御察
し申しあげます
仙台といふ私の懐しき記憶
の中から布施君が欠け今また御
母上様が欠けました亡き

布施君や菅野君等と度々
御宅の/炉辺に集いて寒き
雪の夜に談し合った時御母
上/様からあつち茶をいただ
いたことなぞ今だに眼前/に
彷彿して居りますすあれは私
が二十五の年の頃で/すか
ら今から思ふと最早十四年
も前に成ります
本年御地の高等学校で文学
等の大会のやうな/ものを
開かれるとやらで私にも出
て来いといふ話が/ありまし
たあの時は鳥村君や登張君
などが出掛け/たやうでし
たが私は都合があつて来られ
ず皆さまにも/拜眉の機会
を失ひました
貴兄の御親戚の方で雑誌を
編集して居られる方に/は
当地でたまにおめに懸り御
地の御噂をいたして/居り
ます 十二月二日

木村兄
鳥崎生



明治42年 浅草新片町にて

鳥崎藤村は明治二十九
(一八九六)年九月から翌年
の六月まで東北学院で教鞭
をとりました。敬愛する文
学の先輩・北村透谷の自殺や
自らの失恋などにより、失意
の中で辿りついた仙台でし
たが、心優しい友人や仙台の
美しい自然に心がなぐさめ
られ、「黙しがちなわたしの
唇はほどけて来た」(「仙台雑
詩」)と語るようになります。
藤村の名を知らしめる詩集
『若菜集』の作品は仙台の地
で書き上げられました。
この書簡を受け取った木
村康託氏は後に東北実業銀
行を設立する実業家です。
今回の寄贈者であるご遺族
の方のお話によると、仙台に
おける藤村の支援者だった
人物とのこと。本文に出て
くる「布施君」は、藤村の学
院の同僚の「布施淡」で、藤
村の仙台時代の心の友とも
いえる存在でした。小説「青
年」では「関君」として登場
し、「仙台雑詩」や「木曾路
日記」には二人の交遊がつづ
られていきます。「御地の高等
学校で文学等の大会」とある
のは、この年の二月に開かれ
た旧制第二高等学校の雑誌
部、文芸部の講演会を指し、
鳥村抱月と登張竹風が講
演しています。前年の明治



明治30年8月に春陽堂か
ら出版された『若菜集』

四十一年二月に発行された
旧制二高の『尚志会雑誌』第
七十九号の「編集室より」に、
「仙台博牛会(遺志)」をつ
ぎて、一大講演会を開き中央
文壇又は論壇の名士を聘し
て名論卓説を諸兄に御紹介
可申(中略)については諸兄の
これに対する希望等は、遠慮
なく御申し出で相成度候」と
書かれています。想像の域を
でませんが、おそらく学生た
ちから藤村の名前が挙がり、
講演依頼の手紙が藤村の元
に届いたことでしょう。残念
ながら講演は実現しませ
んでしたが、藤村は仙台につ
いて「私の生涯はそこへ行って
初めて夜が明けたやうな気が
した」(改訂版『藤村詩集』序)
と書き残しており、この書簡
はその思いがうかがえる資料
ではないでしょうか。
藤村が心のふるさと仙台
への再訪を果たしたのは、昭
和十二(一九三七)年に青
春時代の思い出の作品の一
つ「草枕」の詩碑を八木山に
訪ねた時で、この手紙から
二十八年後のことでした。

藤村をもっと 知りたい 方には…

◆藤村が下宿した三浦屋跡 (仙台市宮城野区名掛丁)

藤村は在仙中、何度か住いを替え
ています。最後に下宿した三浦屋の
二階で書いた作品の多くが『若菜集』
に収められました。現在下宿跡周辺
は整備され、仙台城址にあった「草枕」
の詩碑や、「初恋」の詩碑などを一覽
いただけます。



日本近代詩発祥の地 名掛丁藤村下宿[三浦屋]跡記念碑



詩集『若菜集』所収「初恋」の詩碑



◆東北学院資料室 (仙台市青葉区土樋一三ー一)

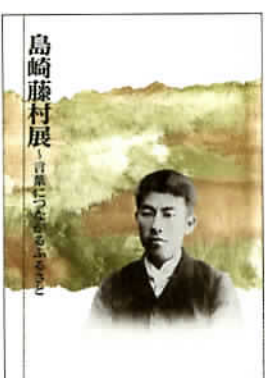
明治十九年に創設された「仙台南
学校」時代から現在にいたるまでの
東北学院に関する資料を収集・保存・
展示し、その歴史を後世に伝えます。
藤村が着任した頃の学校の様子など
を知ることができます。

■開室時間

《授業期間中》
月～金 午前十時四十五分～午後四時
土 午前十時四十五分～午後零時
《長期休暇中》(大学の春・夏・冬休み)
月～金 午前十時～午後三時半
(土・日・祝祭日は閉室)

◆仙台文学館常設展示室

藤村が仙台に滞在した時代を中心
にその軌跡を紹介しています。原稿
や書簡など貴重な資料も一覽いた
できます。



鳥崎藤村展「言葉につながるふたつ」

◆「言葉につながるふたつ」 (二〇〇二年三月発行五〇〇円)

二〇〇二年に開催した「鳥崎藤村
展」言葉につながるふたつ」との図録
です。藤村の生涯を紹介。高田宏「山
国の声」、十川信介「藤村の光と影」
所収。
*当館受付で販売中。郵送でのお届けも
行っています。詳しくは文学館にお問合せ
ください。

訂正

第二十三号で紹介した「新資料紹介
土井晩翠書簡(高田憲一宛)」の「残念
ながら高田氏は晩翠の「此原稿着いた
ならず迅速で具旨通知あり」と
いう申し出に「たえられず」という箇所
は間違いでした。高田氏は全寮制だっ
た商船学校から特別の許可を得て外出
し、速達でお礼の葉書を出されていま
した。申し訳ありませんでした。お詫
びして訂正申し上げます。

展示

支倉常長が欧州へ 出帆して四〇〇年

二〇一三年は伊達政宗の命を受けた支倉常長
率いる慶長遣欧使節が、サンファンパウティスタ
号で欧州へ旅立ってから四〇〇年にあたります。
その出帆を記念して県内のミュージアムが連携し
展示やイベントを行います。当館でも「文学にみ
る支倉常長(仮称)」としてコーナー展示を予定し
ています。



慶長使節船「サンファンパウティスタ」
(宮城県慶長使節船ミュージアム蔵)

予告

春の特別展 「正岡子規みちのくの旅」 はて知らずの記

二〇一三年は、正岡子規が東北を訪れた「はて
知らずの記」の旅から二〇〇年を迎えます。本展
では、子規の東北での足跡と人々との交流をたど
りながら、「はて知らずの記」に記された往時のみ
ちのくの面影に思いをはせていただきます。会期
中、講演会やバス
ツアーなどのイベ
ントを予定してい
ます。



明治20年代の子規